

審判派遣報告書

報告者: 嶋崎 貴(所属: 東京都実業団連盟)

1	大会名	平成29年度 関東高等学校女子バスケットボール大会
2	開催期間	平成29年6月10日(土)~6月11日(日)
3	開催地・会場	船橋市総合体育館(千葉県船橋市)
4	大会参加資格	東京都8校、神奈川県5校、千葉県7校、埼玉県4校 栃木県2校、茨城県2校、山梨県2校、群馬県2校
5	試合方法	トーナメント方式
6	大会結果	Aブロック優勝: 東京成徳大学高等学校 Bブロック優勝: 茨城県立竜ヶ崎第二高等学校

7 担当した試合				
日付	対戦	割当	クルー	ゲーム展開等
6月10日	幕張総合高校 (千葉県) VS 旭高校 (神奈川県)	Ref	藤林比登美 (埼玉県)	幕張総合が序盤からのリードを守り勝利した。両チームともスモールラインナップであったが、インサイドを起点にオフェンスをしかける。ディフェンスは両チームともマンツーマン。幕張総合ベンチからはアピールはあったが、ゲームとしては落ち着いた展開であった。
6月11日	竜ヶ崎第二高校 (茨城県) VS 座間高校 (神奈川県)	U1	北島寛臣 (埼玉県) 本間さとみ (東京)	両チームともインサイドプレイヤーを擁さず、アウトサイドからのドライブと速い展開でオフェンスを展開するスタイル。ディフェンスもオールコートでプレッシャーをかけるスタイルでファウルも多い展開であった。竜ヶ崎が序盤のリードを守り勝利。

8 担当した試合での反省
<p>【6月10日(土) 千葉県立幕張総合高校ー神奈川県立旭高校】</p> <p>ポストアップするプレイヤーに、後ろから触り続けるディフェンスが、ゲーム序盤から見受けられた。ガイドラインにあるハンドチェックに該当するケースであり、ファウルとして判定するべきであったが、RSBQのことや、このゲームでファウルとして取り上げてプレイヤーやチームに正しいメッセージとして伝わるかなど考えすぎた結果、ファウルとして判定することができなかった。ガイドラインに則り判定し、未然に粗暴なプレイを防ぐことへとつなげていく必要がある。(本ゲームは粗暴なプレイにつながることはなかった)</p> <p>両チームからトラヴェリングをもっと判定してほしいというアピールがあった。チームとしてはかなり細かいピポットフットの動きについて意識がいており、私としても注視するようにはしていたが、より丁寧に確認する必要がある。</p> <p>一方のチームからは時折、過度なアピールもあったので、適切な対応をとる必要がある。</p> <p>またゲーム終盤、請求が認められないタイミングで、タイムアウトの請求があり、TOはそのタイムアウトを認めてしまう事象があった。</p> <p>TOに確認すると、請求が遅かったとのことだったので、そのタイムアウトは認めずにゲームを再開した。ゲームクロックやショットクロックも正しい時間に直して再開した。</p> <p>コーチは高校の先生であり、TOは高校生、こちらでTOをコントロールする必要がある。</p> <p>【6月11日(日) 茨城県立竜ヶ崎第二高校ー神奈川県立座間高校】</p> <p>両チームともオールコートで攻守を展開するスタイルであり、それに伴いブロッキングのファウルが多い試合であった。特にランニングプレイをするプレイヤーの着地点に入るケースもあった。</p> <p>そういったディフェンスの見極めが3人同じ基準で一貫して判定ができていなかった。</p> <p>特に私の場合は、絶えず変わるスペースに対して細かい動きが足りずに、正しい判定へと結びつけることができていなかった。</p> <p>それによりリバウンド時のファウルも幾つかノーコールになってしまった。</p> <p>またインサイドプレイヤーがいない両チームだったので、リードのスイッチサイドが減ってしまった。</p> <p>積極的にボールサイド2を作り、3人の視野の分担を明確にする必要がある。</p>

◆ グループディスカッション

今大会のABブロック準決勝8試合は、試合後に、担当クルー、主任2名、B級審判員2名で、ディスカッション形式で担当試合を振り返った。
まずは担当クルーからその試合を振り返ってもらい、その後は主任2人がコーディネーターとなり、各自が気になったプレイや判定について率直な意見交換がなされた。
B級審判員が試合後に率直な意見をいえることが少ない中で、こういった機会はとても有効であり、また当該B級審判員もこの機会を有効に使っており、気になったことは積極的に伝えていた。
また担当審判員も、通常であれば主任1名からしか話は聞けないが、多くの審判員から多種多様な視点で話を聞けるので、いつも以上に多くの気づきを得ることができた。
東京都、実業団連盟に戻ってからもぜひ活用したいと思った。

普段、あまり担当することのない高校生の女子ゲームであったため、高さやスピードへの対応よりも、いつも以上に、平面的なスペースの変化やオフボールプレイ、TOコントロールなどに注意をおきながら試合に臨んだが、やはり試合後の反省では、男子ゲームと同じ動きになっていて、もっと細かい動きが必要であると指摘を受けることがあった。

当ではめる競技規則やマニュアルは同じとはいえ、それぞれのゲームによって異なる特徴をもっと早く理解しそのゲームにあった動きやコントロール、注視すべき箇所の対応等が必要であった。

また今大会は、これまで以上に多くの女性審判員が派遣されており、どの女性審判員もフィットネスがあり、決断力もあり、多くの観客がいる試合の中でも存在感を発揮していた。

またコート以外でも積極的に自身の意見を発言するなど、オフザコートでも積極的な姿勢が感じられた。

関東で最も多くの女性審判が所属している東京都も、今回のような女性審判員を1人でも多く輩出できるように地元で還元していきます。

最後になりますが、今大会で多大なるサポートをして頂きました千葉県協会の皆様、また派遣に際してご協力頂きました東京都協会の皆様に感謝致します。

この経験を、必ずや形として残せるように引き続き取り組んでまいります。